

ソルベーのコンタビリズム・ソシアル

手塚 壽郎

一

全世界が苦悶する社會的危機は近く最も多く其鋭さを加へたりとは云へ、それは昨今に始まつたことではない。然し我らが最近の社會的危機から體驗する苦悶は著しく深刻であると云ふ特色を帶びつゝある。即ち我日東の帝國では震火災に因つて莫大な富が灰燼となつたが爲めに、之が補充の苦悶、中央歐羅巴では獨逸人の眞の蠻的な破壊と驚くべき富の砲彈化とに基因して減退せる富の補充の苦悶が、本來の社會的危機の苦悶に結びつけられつゝある。

精密な數字を掲げて證明するまでもなく、中央歐羅巴の富の破壊は根本的であり、巨大である。識者は何れも、それが餘りに巨大にして且つ餘りに根本的にして其再興は分離せる個々人の力の到

底及び難いこと、詳言すれば國家の力を借るに非ざれば之が復興は不可能であることを説けるが如くであつた。もとより國家は別に生産力を有する譯ではないから、國家の力と云ふ意味は國家が私人の企業の資本に助力を與へると云ふにある。此思潮は、數多かるべき論著のうちにも、特に佛蘭西にあつてはサシシモニズムの復興、(註一)獨逸にあつてはラテウノーの産業主義の提唱、(註二)白耳義にあつてはソルベイズムの復興、(註三)となつて現れてゐる。

(註一) ジャルマン・マルタン教授一九二二年巴里大學勞働法制講義、及び M. Bourbonnais, *Le neo-saint-simonisme et la vie sociale d'aujourd'hui*, thèse, Paris, 1923.

(註二) フリックス教授一九二三年巴里大學戰時及戰後に於ける産業組織、講義並に増井光藏君の『ラテウノーの觀たる産業組織』(貨幣經濟の研究四六五頁以下)等參照。

(註三) L. Bertrand, Ernest Solvay, 1919; Barnish, *Système de politique positive d'Ernest Solvay*, 1919.

今復興の聲全土に漲りつゝも、其復興の實案外に擧がらざる我國に於て、此ら三つの思想の組織を考ふるは學徒にとつても實際家にとつても若干の興味なきことではない。然しラテウノーの産業主義は既に増井君に依つて簡略ながらも紹介せられたことであり、ネオ・サンシモニズムの論究に就ては他の機會に於て之を爲すこととし、今は最後のソルベイズムのみを考へて見ようと思ふ。ソルベイズムは大きな一思想體系ではあるが、其哲學思想の體系より財政論に至るまで、何れも筆者

の能力を超越するものであるから、本稿に考ふる所のものは、ひとり其コンタビリズム・ソシアル Le comptabilisme social である。尙且つ以下に於てソルベールの哲學思想を概観する所以は、單に、ソルベールの思想體系に於てコンタビリズム・ソシアルが占むる地位を比較的に明瞭ならしめむが爲に過ぎない。

二

Ernest Solvay は一八二八年四月十六日 Brabant wallon の一寒村 Rebecq-Rognon に生れた。父 Alexandre Solvay は鹽の精製者であつた。彼は油脂、石鹼等の卸商を兼ねたと云ふ。彼は頗る快濶にして而も強直な性質をもつてゐたといふ。そして同郷の人々の尊敬と同情とを得て居つたと云ふ。母は夫と子供の爲めにのみ生きた家庭の母であつたと云ふ。

ソルベールには一人の弟 Alfred Solvay (一八九四年に死んだと云ふ) があつた。郷里の學校を了へるや、二人は Malone にバンシヨネールとなつたのである。兄ソルベールは頗る神經質にして、常に靜止することなく、走つたり争を爲すのを常としてゐたと云ふ。されど彼は病の爲め此處を退いて、歸郷するの已むなきに至つた。郷に歸りて父母の業を助けつゝも、其餘暇に彼は熱心に初步

の物理や化學の書を繙讀したと云ふ。彼が次第に化學の理論や實驗に深き興味をもつに至つたのはかくしてゐる。二十二の年即ち一八六〇年彼は、瓦斯會社の經營をしてゐた叔父 Sennet の招ぎに應じて、此瓦斯會社の復經營者となつたのである。ソルベールの生涯の一新生面はこゝに開かれたのである。叔父は極めて嚴格な人であつた爲め、ソルベールは其業務に専心せねばならなかつたけれども、好む化學の實驗や研究に便宜を得たことは云ふまでもない。彼は日々瓦斯の淨化、アンモニアの抽出、瀝青の分離、瓦斯壓力の調整などを考へねばならなかつた。彼が瓦斯工場のアンモニア含有液を利用してアンモニア水を製造する方法を發明したのはかゝる事情の下に於てゐる。

或日ソルベールは實驗を行つて、土鉢の中で炭酸アンモニウムを搗いてゐた時、之に食鹽の溶液を注いで攪拌したが、彼は此液が濃厚となり、白色の沈澱が形成せらるゝを見た。之が重炭酸ソーダであつて、これより容易に炭酸ソーダを製出することが出來た。

彼は一八六一年四月十五日此ソーダ製法の特許權を得た。時に彼は僅かに二十三歳であつたのである。翌年ソルベールの家族はソルベールの發見に信賴を懷き、瓦斯工場に程遠からぬ個所に小工場を設けて經營をすることゝなつた。弟ソルベールも英國より歸りて協力し、友朋の一人 Achery なる者が製造主任となつた。然し多大の努力にも拘らず、成效容易ならず、三人もろ共實驗中窒息して

まさに死に瀕せしことさへある。漸くにして十二時間に百三十キロのソーダを製造することに成効して、此製法の工業的價値を認められ、又漸くにして十三萬六千法の組合を起して工場を設立したのが一八六三年である。

苦心の結果、此工場を設立して五ヶ月の後一日二百二十七キロの製造をなすに至つたのであるが、此れはまだ多額とは云はれぬ。一八六六年六月に至り一日千五百キロ、一八六七年に至り一日三千キロを製造するを得るに至つた。現在三百萬噸のソーダの世界の産額中二百萬噸はソルベーの方法に據れるものであると云ふ。一八五〇年頃ソーダー一噸は七百フランであつたのが、一九一四年には僅かに百フランに下落したことを思へば、ソルベーの功績の如何に偉大であるかを窺ふことが出來やう。

彼は此ソーダの製造に依つて巨萬の富を集積するに至つた。ブルツセルのソルベー研究所は彼の寄附によつて成れるものである。ソルベー研究所には生理學研究所と社會學研究所とがある。後者には讀者に極めて便利なる附屬圖書館があるとのことである。彼は富めりと雖安息を求むることなく、貧窮と不正義とに滿ち充てる現社會の組織の改良を考へつゝある。其工場は勞働者に對する設備と社會政策的施設に於て模範的なものとせられてゐる。筆者は巴里に遊學中勞働者街に住居し

て、巴里の労働者と屢々語る機會を得たのであるが、先づ余の知る巴里の工場労働者にしてソルベールの工場を知らざるものは殆んど無かつた。(註)

(註) 右に記せるソルベールの略傳は L. Bertrand, Ernest Solvay, 1918, p. 15 et suiv.; V. Izart, La Belgique au Travail, 1911, p. 154 et suiv.; E. Deiss, Etudes sociales et industrielles sur la Belgique, 1900, p. 63 et suiv.; A. Deillieux, La philosophie de M. Ernest Solvay, 1918, p. 6 et suiv. 等に據れるものつある。ソルベールは數年前既に死去せられたと筆者は記憶したので、必ずや Revue d'économie internationale 中に一冊位の追悼號あるべしと思ひ、之を檢索したが見當らぬ。或ひは氏は今も生存するかも知れぬ。

三

ソルベールに據れば、現今宇宙のあらゆる現象の説明に、従つて亦社會の現象の説明にも、總て科學を以てせむとする著しく明白な傾向が流れてゐる。『社會は經驗的に進化し、經驗的に組織せられてゐる』のである。(註一) 宗教的信仰に基礎を有する説は今日と雖尙重要なる職分を盡してゐるが、然し次第に昔日の威力を失ひつゝある。一時的復興を見たる形而上學すら既に凋落の悲運を示し、幻想的組織として葬り去られむとしてゐる。そして科學は、現今までに與へられたる狀態に於ては、現象の説明にエネルギー主義を以てせむとする傾向をもつてゐる。(註二)

(註1) Solvay, Sur les fondements positifs bio-psychique et énergéo-productiviste de l'évolution sociale, Revue d'économie internationale, 1913, vol. IV, p. 504.

(註2) Barnich, Essai de politique positive basée sur l'énergétique sociale de Solvay, 1919, p. 97.

現代の科學は簡單にして普遍的なる原理を求めつゝあるが、エネルギー主義は現代の科學の要求に一致した結論を齎らすのである。即ち現代科學の求むる前提はまさしくエネルギー主義の前提であるから。其何れによるも、有機界無機界共に何らの氣まゝの創造ではなく、『運動と統一と秩序と而して法則との支配する所のもの』である。(註)

(註) Solvay, Science contre religion, p. 21 cité par Barnich.

ソルベールに據れば、生物は連續的にエネルギーを發生しつゝ其環境を酸化する爲に組織せられたる反作用である。其存在の意義も法則も目的も其利益も出來るだけよい條件のもとに行はるゝ酸化の生産と持續とに過ぎない。『生命なる語もかゝる特有の反作用のエネルギーの活動狀態を表現するものに他ならない。従て一有機體の生命は此反作用のエネルギーの量の直接的函數に他ならな

す。(註)

(註) Solvay, Notes sur des formules d'introduction à l'énergétique physics et psycho-sociologique, 1906, édition Mischel Thron, p. 3.

以下の説明概ね此書に據る。

此反作用の組織は物質を入れて酸化する一ヶ又は數ヶの入口、及び此酸化の殘滓を放出する出口の存在を豫想する。而して E_0 を以て一の時間單位中に有機體が其環境より得て消費するエネルギーの量即ち酸化せられたる物質(消費せられたる物質)に存在せる潜在的エネルギーの總量を表し、 E_F 及び E_R を以て夫々固定附着し終れる物のエネルギー及び排除せられたる物のエネルギーを表し、 E_T を以て一時間單位中酸化によりて發生せられたるエネルギー全量を示すとする。而して此エネルギー全量はカロリメートルに計量せらるゝ E_T と機械的形式の下に現るゝエネルギー E_F とより成る。然らば發達中の有機體に於ては

$$E_L = E_u + E_T = E_c - (E_F + E_R).$$

完成せる有機體にありては次式を得る。

$$E_L = E_u + E_T = E_c - E_R.$$

故に有機體を、其化學的構成に依りて其が消費する物質のうちに潜勢的狀態に存在するエネルギーを變換するものと考ふれば、或時期に於ける其功率は其發出せる全エネルギー E_T と消費せられたる物質の全エネルギー E_c の比を以て表さる。即ち

$$R = \frac{E_t}{E_c} = \frac{E_c - (E_r + E_x)}{E_c}.$$

此觀點より見るとき有機體は三つの時期を經過するものである。即ち充づ有機體を組織する爲に固定附着せしエネルギーの變動するに従つて、其所用のエネルギー從て機能率の變化する時期、次に完全なる發展を遂げたる時期即ち物質の利用即ち酸化作用の最もよく行はるとき、換言すれば E_c が 0 となり、 E_r が最小となり、其機能率最大となる時期を経て、最後に有機體は E_c 増大し、物質の利用益々小となり、機能率減少し、有機的反作用停止するに至る。

一生涯に互れる此らの時期の總ての機能率の平均額は生活の周期を規則的に遂げ行くものと考へられたる此有機體の平均機能率と稱せらる。故に平均機能率は一定の量にして、常態の有機體に就ては一定してゐる。 E_c はエネルギーの常態の消費と呼ばるゝ。

以上の叙述は孤立せる有機體の場合であるが、社會に生活する人間の場合に於ても、

$$E_t = E_a + E_r = E_c - (E_r + E_x)$$

は個人の物的エネルギー（今智的エネルギーの量を除く）を示すことが出来る。然るに社會を構成する人間の集團を考ふる場合には單に個人的物的エネルギーの合計を以てすることが出来ぬ。社會

的觀點から考ふべきは E_s 中社會的に利用し得べき部分 E_s' のみである。それは左の如く表される。

$$E_s = E_c - (E_f + E_r + E_t).$$

然し社會のエネルギーは單純に社會を構成する人間の個人的 E_p の和ではない。各人は社會のうちにありて有機體として其物理的エネルギーを保留せねばならぬ。從て社會生活もエネルギーの生産の機能を保證せねばならぬ。然し社會は之を構成する總ての有機體が提供する利用し得べきエネルギーが出来るだけ完全に總ての有機體の利益となるよう、利用せらるゝを利益とする。されば或場合には社會は個々の有機體に不利となるをも顧み無い。故に社會の場合には個人のエネルギーの方式は適用され得ない。それは社會の利用に資せらるゝ程度と其持續とに比例して、社會のエネルギー中に入るからである。此社會の利用性の程度は個々の有機體と共に變化する。同一の有機體に於ては其時期即ち若老に依存し、亦偶然的出來事例へば病氣……等に依存する。故に社會に於ける或個人のエネルギーを示す方式のうちには、社會の利用性なる項が入り、此項は利用せらるゝエネルギー E_s 中社會的立場から觀て眞に利用せらるゝ部分を示す。此部分は $+ \text{プラス}$ たることもあり、 0 ゼロ たることもある。

各人の生命の或時期に於ける一時間單位に於ける社會的エネルギーは利用し得るエネルギーに此時に於ける社會的利用性の係數 ϵ を乗じたる積である。故にそれは ϵE_{pot} にて表される。社會的エネルギー E_s は持續の時間 τ 中に於ては ϵE_{pot} となる。一個人の生涯 τ 中に於ては規則的又は偶然的なる同様の項の合計である。

$$E_s = \sum u E_{\text{pot}}$$

故に社會的物的エネルギーの一時間單位内に於ける總量は、個人數を ρ とすれば、簡単に個人の社會的エネルギーを加算するに依て得らるゝ。

$$E_s = \sum_1^{\rho} (u E_{\text{pot}})$$

然し嚴密に云へば個人に附隨せる物的エネルギーの量 E_{pot} 及び社會的利用性の係數 ϵ は生命の各時期と共に異なるのみならず、生命の各瞬間に於て異なるのである。即ち ϵ と E_{pot} とは個人の年齢の函數、換言すれば時間 τ の函數である。(但し生命の出發點と時間の出發點とを同一なるものと假定す。)而して個人の社會的エネルギーの量は無限小の時間 dt に於ては、

$$u E_{\text{pot}} dt$$

となる。或時間 τ に於ける社會的エネルギーの量は、

$$\int_t^{t'} u E_{udt}$$

にて表され、一個人の生命の全持續「中に於ける社會的エネルギーの量は

$$E_s = \int_0^T u E_{udt}$$

である。但し此積分が可能なるべきが爲には、二つの函數 $E_u = u(t)$, $E = E(t)$ が知られねばならぬ。一定の時間 θ 中に於ける社會的エネルギーの社會的總量は

$$E_s = \sum_1^n \left[\int_t^{t'} u E_{udt} \right]$$

にして、先に示したる式にて置き換ふれば

$$E_s = u [E_c - (E_F + E_R + E_T)]$$

にて表さる。 E_c , E_F , E_R , E_T は夫々消費せられたる、附着せられたる、排除せられたる、熱に變形せられたるエネルギーの各合計を示し、 u は此社會を構成する個人のエネルギーの考へられたる時間内に於ける社會的利用係數の平均を示す。故に

$$R_s = \frac{E_s}{E_c} = \frac{u [E_c - (E_F + E_R + E_T)]}{E_c}$$

は個人の有機的エネルギーに依存する程度に於ける社會的エネルギーの功能率を示す。

以上の叙述によつて社會的に利用せらるゝエネルギーは消費せらるゝ物質のエネルギーに依存するものであることが明である。而して此消費せらるゝ物質とは經濟上消費せらるゝ財と名づけらるるものである。(註)

(註) Solvay, Note sur le comptabilisme social, 1900, p. 38.

以上の叙述に於ては所謂『腦の現象』と稱せらるゝものが殊更に考へられてゐない。此現象は有機的現象の基礎たる酸化作用にて表され得ない。換言すれば此現象はエネルギーの作用に相應するものではない。此現象は有機體の神經細胞のうちに於けるエネルギーの一般的分配の諸状態を表すものに過ぎない。此分配の状态は或ひは外的刺激の下に又は有機體それ自らによりて自動的に誘起せられ、絶えず且つ限なく變化する。各思想は神經細胞に於けるエネルギーの分配の一時的状態である。此状態は古い刺激が再び誘起せらるゝより生ずることもあり、或ひは古い刺激の結合、又は全く新なる外的刺激より生ずることもある。智的現象と稱せらるゝものは此らの思想の連續的状态である。此智的現象と結合せる有機的表示は筋力の運動を伴ふ熱力の運動である。従て此らの現象は外的又は内的刺激の總體に基いて有機體内に起る酸化作用に相應するものではあるが、生ぜる神

經細胞の現象はそれ自身にては何らの酸化作用を生ぜしむるものではない。故に神經の活動と同時に生ずる酸化を以て其活動を測定することは出來ぬ。これが前記の方式に神經活動の加へられなかつた理由である。

個人的觀點に於ては神經細胞の常態的運用は生理的又は道德的秩序の破壊の原因を除き個人を保護するものである。社會的觀點からはそれは人間全體の自然に對する征服力を増加する。換言すれば神經の常態的運動は利用し得る自然及び人間のエネルギーの社會的利用をよくし、社會的エネルギーの功能率を増加する。されば之を間接にエネルギーの方式に含ましむることが出来る。

$E_u = E_C - E_R$ に於て、知識ある者は E_C を減じ、從て E_u を減ずることが出来る。 E_R は著しく變化するものではない。 E_u を知識なき者が一労働をなすに費せるエネルギーとし、 E_R を知識あるものが同一の労働に費せるエネルギーとすれば、智的能力を測定するものは

$$C = E_{u_1} - E_{u_0}$$

である。知識なき者にありては C は 0 にして、知識ある者に於ては C は最大にて、其兩極限の間に於て C は種々なる値をとることが出来る。そしてそれは節約せられたるエネルギーを示す。今知的能力を適用したる一時間單位内のエネルギーの純利得を C にて表す。然るに此利得は潜勢的

なるを得る。個人の消費の爲めに利用せらるゝこともある。又有害に用ひらるゝことも無いではない。又將來のエネルギー増加の爲に用ひらるゝ場合もある（教育の如き）。かくて一時間單位に於て社會的に利用せらるゝ心理的エネルギーは E_{ps} にて表さるべく、 α を知的能力の適用時間とすれば $\alpha'E_{ps}$ となる。

然し $\alpha'E_{ps}$ は智的活動のエネルギーの量を盡すものではない。智的能力の常態的運動は個人の物的エネルギーを節約するは勿論、或程度まで社會のそれをも節約するのみならず、之に因つて生ずる發明及び思想はまた人類のエネルギーを節約する。故に個人の社會に於ける全エネルギー E_{ps} は E_{ps} 、 $\alpha'E_{ps}$ の他 E_{ps} を含む。後者はイデオ・エネルギーと稱せらるべく、個人の生産智的能力の事實の存在に因り實現せらるゝエネルギーの社會的利得を示す。

$$E_i = \sum \alpha E_{ps} + \sum \alpha' E_{ps} + \sum E_{ps}$$

此らの E_{ps} 、 E_{ps} は物的エネルギーの如く、個人によりて著しく異ると共に、社會的利用の係數 α の如く生命の時期によりても異なる。且つ E_{ps} は一生命の函數たるに止らずして、無限の時間の函數である。例へば或發明が發明者の生存中何らの價值を認められなかつたが、それが一度世人に理解せられて利用せらるゝに至らば、永く其効果を有するが如きである。

社會に於ける個人のエネルギーの量の合計は

$$E_0 = \int u E_u dt + \int u' E_u' dt + \int E_u'' dt$$

である。此式に於て第一及び第二項は^正0と一生命の持續「」との間に積分せられ、第三項は^正0と無限との間に積分せらる。

$$E_0 = \int_0^T u E_u dt + \int_0^T u' E_u' dt + \int_0^{\infty} E_u'' dt$$

社會のエネルギーの式は此和を示す式である。

有機體なる人間は與へられたる環境のうちに生れ、發展し、生活する。其存在は抗すべからざる一般的條件、例へば地理的地位、土地及び地下の自然的富、氣候等の條件に従ふ。平均人の物理的エネルギーの收得の功能率の増大は此環境を最も有効に利用するに依つて行はれる。然し同時に社會的環境たる智的、道德的環境も亦社會全體の利益となるよう最も完全に利用せられねばならぬ。

されば社會を成す人間の幸福は消費せらるゝ物の量と性質とを増大し、同時に平均の人の智的能力を増すに非れば、得らるゝものではない。ソルベールはかゝる自らの主張をプロデュクティビズム(Le productivisme)と名づけてゐる。『生産主義者たることは、人間の幸福を保證するに従ふべき眞

の途があらゆる方法により、人間が欲し欲するであらう物的及び非物的物の生産を發展するにあることを認むることである。』(註)

(註) Solvay, *Principes d'orientation sociale*, 1904, pp. 33—34.

四

生産主義の原理は物理化學的法則より出て來るものである。従て經驗界たる現實の社會に於ける此主義の妥當性は法則の現實に於ける妥當性に依つて決せらるべきである。筆者はこゝに此點に於ける此主義の難點を考へない。(註) 只然し人間幸福の問題即ち社會問題の解決が生産の増大のうちに存すと云ふは眞であらうか否かを問ふて見たい。

(註) 此點に關する此主義の難點に就ては、Dettlioux, *La philosophie sociale de M. Ernest Solvay*, pp. 17 et suiv. 參照。

多くの經濟學者並びに社會主義者に依れば、社會問題の解決は分配問題の解決に俟つべきものであると云ふ。人間にしてみても正義を求め得れば、極めて乏しい生活の物的基礎に満足し得るものならば、此思想は誤ではないであらう。然し分配上の正義を實現せむとすれば急激なる變化を社會組織のうちに生ぜしめねばならぬ。これはソルベールが欲せざる所である。彼が望むは社會の組織の漸

進的にして動搖なく行はるゝ改良である。「眞に保守的なる者は社會組織の進化が漸進的に且つ出來得る限り動搖なく行はるべきよう努めねばならぬ」(註)と彼は云ふ。

(註) Citepar L. Bertrand, E. Solvay, p. 39.

かつてノヴィコウは『現代社會に於ける浪費』なる書物に於て、人間の幸福なる生存には一ケ年に砂糖約五十キロ(?)を要する、今五才以上の人間を十三億とすれば、一ケ年六百五十億キロ(?)の砂糖が無ければならぬ、然るに世界の砂糖の産額は九十億キロに過ぎぬと説いた。云ふまでもなく輓近の總ての生産の狀態と三十有餘年の昔に屬するノヴィコウの時代のそれとの相異は眞に隔世の感を催さしむるものがあらう。現今に於て生活必需品の如きは可成り豊富になつてゐることは疑を容れぬ。然し住居の如きものに至つては、必要の充されざるもの甚しい。生産の増大を計るべき必要あるは言を俟たぬ。只疑は増加せられたる生産物が現今の社會組織のうちに於ては富める者の手中に歸するのみに非ざるか否かにある。

此疑問は現代の社會組織の下に於て提出せらるゝ限り、バレットに依つて解かれてゐる。(註一)バレットに據れば『人口に比較して富が増大するときは、最小の所得が増大せらるゝか又は收入の不平均が減ずるか又は此二つが共に生ぜらるゝ』(註二)故にソルベールが人間の幸福を増加せむが爲めには、

我らは生産主義者でなくてはならぬ、必要にして有用なる物を出来るだけ多く生産せねばならぬと云つたのは當然は認せらるべきであらうと思はるゝ。殊に彼は物的生産と併せて智的、道德的進歩の必要を力説するからである。

(註一) Pareto, La courbe de la répartition de la richesse, 1896 (une broch. de 15 pp.)

(註二) Pareto, Cours d'économie politique, t. II, p. 324. (第二卷のみ私蔵)

先にも云つたように、ソルベールは社會組織の急激な進歩を好まない。生産力の増大を計るにも、彼は現在の社會組織の輪廓を認むる。『人間に必要な總ての物を生産するに、己の利益の他に眞に有力なる動機を求めむとするは迷妄である。己を犠牲とする人は極めて少い。かゝる人は例外である。通則、それは自己主義者である。』(註一)『利己主義が普通であり、献身は稀である。』(註二)故に『前進の刺激として頼るべきは私的利益である。それは社會の基礎であり、社會はそれを欠き得ない。それは根本に於て有機體の生命の利益であり、此意味に於てそれは物理化學的にして、従て破り得られざるものであると云ひ得らるゝ。』(註三)

(註一、註二、註三) Solvay, Principes d'orientation sociale, p. 24.

彼の組織は所有權を尊重する。『労働者階級が政治的權力を得るとき私的資本の收用を強要し得

る状態にあると信ずるのも亦迷妄である。私有資本を全く廢止し、國家の財産となすとは、言ふに易い。然しそれは言葉に過ぎずして實行のプログラムではない、遠い々々實現のプログラムでさへあり得ない。』(註)

(註) Solvay, Ibid., pp. 25—26.

彼の組織は自由を尊重する。『人間は自由であらう。人間の學說が光彩を放つたとき以來、社會は著しく進歩し、今や社會的プログラムのうちに、此新なる要素に重要な地位を與へざるを得なくなつた。』(註)

(註) Solvay, Ibid., p. 22.

彼が希ふ所は資本主義的組織を一層進展せしむると共に、勞働なく利益を收むる資本の力を減じ、個人の勞働力を増加し、勞働する者をして自ら作り出せる生産物の部分のうちに合理的部分を得せしめむとにある。然るにソルベーに據れば、此の實現を妨ぐるものゝ著しきは現代の貨幣制度である。『ソルベーは他の社會改良家と等しく交易の組織が頗る費用多いものであるのに驚いた。且つ此組織は費用多いのみならず、生産に著しい障礙を與へてゐる。能力あり知識ある者は金錢的手段無さが爲め無力なること、資本を所持する者は之を充分に利用すべき能力無きこと屢々で

ある。富の生産なる觀點から見るとき、これは二重の障礙を與へてゐる譯である。』(註)

(註) L. Bertrand, E. Solvay, p. 54; Detilleux, La philosophie sociale de M. E. Solvay, pp. 50—51.

ソルベールに據れば、かゝる貨幣制度はコンタビリズム・ソシアル Le comptabilisme social の構成によりて根本的に廢止せらるゝと云ふ。

『國家は國立記帳局を開く。此記帳局の任務は貨幣、動産、家屋、土地等各人の財産を評價し、之を登簿するにある。

『此人の財産が五萬フラント評價せられたとする。記帳局は通帳を作り、原簿に基き此人の財産額を之に記入し、交付する。

『今家具屋が其財産を記帳局にて登簿し、また其他の工業家、商人、地主等何れも同様の登簿をなしたと想像する。

『家具屋が材木五千フランを購入すれば、其財産中より五千フランを減ぜられ、材木を賣却せる商人の財産は五千フラン増加する。

『此取引を記すに、材木商の通帳には家具屋即ち第一號の通帳の所持人が彼より材木五千法を買入れたる旨が記入せられ、同時に財産額は五千フランを増加せらる。そして家具屋の財産額は五千

フランだけ減殺せらるゝ。

『家具屋は買入れたる材木にて、家具を作り、それを商人即ち第三號の通帳の所持人に賣却したとする。第一號の通帳は代金額たる一萬フランを増加せられ、第三號の通帳は一萬フランを減ぜらるゝ。』

『此組織の利益は、銀行又は資本の貸手の仲介なきこと、利子を支拂ふ必要なきこと、材木の賣却にも家具の賣却にも、手形の割引と云ふが如きものなきこと等の點にある。加ふるに動産も家屋も土地も資本化せられ得べきが故に、資本は著しく増加し、生産は増大せらる。』(註)

(註) L. Bertrand, E. Solvay Pp. 54 et suiv.; Detilleux, La Philosophie sociale de M. E. Solvay, Pp. 51 et suiv.

次いでソルベーが擧ぐるコンタビリズムの利益に、最も重大なものがある。“Qui n'entrevoit donc que dans l'avenir, au grand avantage social, l'Etat pourra accorder du crédit comptabiliste non seulement au productiviste possesseur de biens, mais encore au productiviste capable non possesseur de biens sur les simples garanties de sa capacité, garanties qui résulteront de mesures et de preuves socialement prises à cet effet pendant le capacitarat même.

“Ainsi serait atténuée cette inconséquence, cette bizarrerie de notre état social qui fait qu'actuelle-

ment le capable n'ayant pas de fortune n'a pas le droit de produire et de générer le bien-être social, tandis que l'incapable ayant de la fortune en a le droit, mais, en fait, ne le peut. D'où perte sur toute la ligne pour l'humanité.”(註)

(註) Solvay, Notes sur le productivisme et le comptabilisme, p. 159.

五

コンタビリズム・ソシアルは經驗的基礎の上に立つ。『現代は既に自然にコンタビリテ・ソシアルに向ひつゝある。取引のメカニズムの最近の進化は明に之を示してゐる。』

『現在一般に考へらるゝ所に據れば、賣買の一切の作用は商品に對する貨幣の交換を必要とし、若干の數のフラン、マルク……等を支拂ふを要する。』

『然るに實際に於ては我らは既に一部分交換の概念から離れて、*compte* (帳簿上の支拂) の概念に入り來つてゐる。大きな取引——英國殊に米國に於ては細かい支拂に至るまで——に關する債權及び債務は貨幣を取扱ふことなく、當座預金の登簿振替によりて決濟せられる。……かくて一切の貨幣の取扱は殆んど廢止せられたるに近い。……此方法は銀行業者相互の間にも擴張せら

れ、貨幣にて授受せらるゝは最終の差引残額のみ過ぎない。』(註一) ソルベーイストの一人なる De Greef も云ふ、『既に久しい以前から——既に昔から——金屬貨幣は重要な職分を盡すことを止めてゐる、到る處常に、社會の進歩或階段に達すれば、なせる進歩は貨幣を節約することであつたし、また節約することである』と。(註二)

(註一) Solvay, Principes d'orientation sociale, pp. 72—73.

(註二) De Greef, Essai sur la monnaie, Annales de l'Institut des sciences sociales, 3^e année, p. 230. (在巴里 Le Musée Social 所藏)

更にまたソルベーイは奧太利國に行はれ始めた郵便振替貯金に其經驗的證明を求め、結びて云ふ、『故に此ら三萬の人の相互の關係にして生活のあらゆる必要に應ずるを許すに充分とならば、此らの人々は貨幣無くして濟み得るであらう。そして此結果に到るには、一の公の機關が此らの總ての人々の勘定を帳簿上にて支拂決濟するのみを以て足りる』と。(註)

(註) Solvay, Ibid., p. 75.

右はソルベーイが求めたるコンタビリズムの一方面の經驗的基礎であるが、同時に彼は他の一面の經驗的基礎を中央銀行の割引制度に求めてゐる。『白耳義國立銀行、佛蘭西銀行……此らの銀行は充

分なる擔保を提供する者には其何人たるを問はず銀行券を交付してゐるではないか。確實な證券、確實なる者の署名を以て、我らは紙幣即ち金屬貨幣に等しき額の紙幣を得ることが出来る。』(註)

(註) Solvay, Ibid., p. 76.

六

我らは多くの場合に於て債權者にして債務者であるが、或人の債權者が同時に此人の債務者たる場合は極めて少い。故に貨幣を用ふことなくこれらの相殺をなすには總ての人の債權を集中せる組織を要する。これはコンタビリズム・ソシアルの第一條件を成すものであるが、コンタビリストは此組織を國家の手に依つて強制的に行はむとする。そして之に依てコンタビリズムは支拂のメカニズムを變へむとするのであるから、其批評は先づ第一條件を手初めとせねばならぬ。

次にコンタビリズムに於ては總ての債權債務の集中を要すること、最も發達せる振替制度に於けるが如くであるが、後者の場合には預金の存在を必要とする。然るにコンタビリズムにありてはかかる預金なるものがない。コンタビリズムが能力あり知識ある無産の勞働者をして充分に其力を發揮せしめ得るも、此預金無きがゆゑである。従て我らの批評の第二の標的たり得べきものも亦此點

であらう。

最後にコンタビリズムは金屬貨幣を全廢し、價值の本位を心理的なものとなさむとする。我らの批評の第三の對象たり得べきも此點であらう。

七

現今の銀行預金の振替制度に於ては、預金者は銀行より小切手帳を受ける。預金者にして不正直ならば預金額以上の小切手を偽り振出すことが出来る。此場合には銀行は支拂を拒絶する。従て小切手を受取るも、必しも確實なる價額を得たことにはならない。此弊害を除く爲め種々な方法が考へられてはゐるが、支拂保證以外に確實を期せしむる方法は少ない。而も支拂保證は手數と時間を要する。ソルベールは彼のコンタビリズムにありてはかゝる弊害は全くあり得ないと云ふ。

記帳局は小切手帳をくれぬ、通帳のみをくれる。此通帳は白紙と赤紙との二部分から成つてゐる。通帳の第一頁には姓名其他其所有者たる地位を明ならしむるもの、寫眞等が附してある。記帳局は之を其原簿に登録する。白紙も赤紙も小さな部分に仕切られ、それらには十フラン、二十フラン、五十フランなどゝ金額を示す數字が書いてある。白紙は積極即ち資産を記入せらるゝに用ひられ、

赤紙は消極を記入するに用ひらるゝ。故に此通帳には一定額の繰越原本 *l'import* と不定の收支額が記入せられる。

今此らの通帳の所持者の一人 *A* なる人が、百フランの支拂を *B* に對して行はむとする。彼は己の通帳を携へて *B* の下に至る。*B* は此通帳を検し、*A* の財産額を知る。繰越原本が例へば千フランで、且つ白紙に五十法、赤紙に百フランの記入があつたとする。*B* は *A* の財産額が九百五十フランなることを知る。*B* は *A* の通帳の赤紙の部分（例へば五十フラン宛の部分ならば其二個に跨りて）に、『貴殿の通帳より金百フラン也拙者の通帳へ移し入れられたること實證なり』 (*Je certifie qu'il est sorti 100 francs de votre carnet pour entrer dans le mien.*) と記入し、署名し、日付を記入する。*A* は同様に *B* の通帳の積極に『貴殿の通帳に拙者の通帳より金百フラン移し入れられたること實證なり』 (*Je certifie qu'il est entrée 100 francs dans votre carnet venant du mien.*) と記入し、署名し、日付を記す。

總ての支拂はかくして行はれる。而して與へられたる時に於て *A* も *B* も記帳局に至りて、舊通帳の更新を要求する。記帳局は繰越原本と收入との合計より支出を差引し、殘額を新通帳の繰越原本とし、記入の上之を交付する。(註)

(註) Solvay, Notes sur le productivisme et le comptabilisme, p. 23; Aussi voir M. Ancy, Les systèmes socialistes d'échange, 1907, p. 305.

尤もソルベールは現在の状態より一躍此状態に至らむとするのではない。彼は右の如き理想的状態に至るに三つの階段を考へる。

最初には小切手帳を用ゆる。此小切手帳には繰越原本が記入せられてゐる。小切手帳には引渡したる小切手の控が附してある。支拂人は小切手に金額、日付を記入し、署名し引渡す。受取人は控に金額を記入し署名す。(記帳局は此控に基き消極を計算する。)受取人は受取れる小切手を自己の小切手帳の所定の場所に貼付する。一定の時に至り記帳局は各人の小切手帳の收支を計算し、新なる繰越原本が算出せられ、繰越原本は再び利用せらるゝ。

此階段を経れば、次には切手式小切手帳を用ゆる。小切手帳は一定金額の切手の如き、ワクから成つてゐる。署名に代うるに孔を穿つ。切手は孔を穿れたる後切れ離され、交付せらる。受取人は控の切手に孔を穿つ。

次の階段に於ては、記帳支拂用の通帳を用ひる。此通帳には先に述べしが如く白の部と赤の部とがある。白の部には収入を、赤の部には支出を記入する。支拂をなしたる時は其受取人は支出の部

の控に其旨を記入せねばならぬ。支拂をなしたる者は受取人の収入の部に其旨を記入せねばならぬ。従て此方法は支拂人と受取人とが相面接するに非れば行はれ難い。ソルベールは遠隔の地の人々の間に於ける支拂に就ては何も云つてゐない。巴里のコンセルバトリア教授オーキュイはソルベールの意を擴張して、此場合には振替貯金の法に倣ふべきであると云ふ。(註一) Aは巴里に、Bはマルセイユに居住すると假定する。今AよりBに支拂をなさむとすれば、Aは巴里の郵便局に至りて、マルセイユのBに支拂をなさむとする意志を述べ、己の通帳を呈示する。郵便局はAの資産を検し、充分ならばそれより支拂はるべき金額を通帳の赤い部分に記入し、日付を記し、署名する。そして此郵便局は其旨をマルセイユ郵便局に通知する。マルセイユ郵便局はBを召招し、Bの通帳の積極に金額を記入し、日付を記入し、署名する。郵便局は全國土に互りよく組織せらるゝが故に、かゝる機能は敏速に行はるゝ。(註二)

(註一) Auncy, Les systèmes socialistes d'échange, pp. 307—308.

(註二) 尙メカニズムの詳細なる記述に就ては、Solvay, Nôtes sur le comptabilisme et le productivisme, pp. 96 et suiv. 參照。

かく提唱せらるゝ組織は何らの批難を受けぬであらうか。

先づ此方法は文字を解せざる者に適用し難い。或ひは云ふであらう、かゝる批難は全く退歩的見

方の憂であつて、文明の發達を思はざるものであると。殊に生活上通帳への記入を欠くを得ないとすれば、各人は勉強するに至るべく、無學者は其跡を絶つに至るであらうと。けれ共財産の増減の最終の殘額を知るには、多くの計算に關する知識を要すべく、殊に言語を異にする者への支拂をなす場合には語學の知識をも必要とする。現状より察して此程度の知識の普及を近き將來に望み得ないようである。

次に、此運用は清廉に行はるゝを得るであらうか。かくも抽象的な支拂を受くる者が、通帳の指示する財産状態を信じ得るであらうか。通帳の所有者が自ら虚偽の記入をしたり、署名したり、或ひは共謀者をして署名せしめたりせぬであらうか。勿論受取りたる者は支拂人の手に依りて其旨を通帳に記入せらるゝのであるが、記入を受くる通帳は常に受取人たる者の手中にあるのではないか。

ソルベールは第一頁に記入せられた繰越原本にしか此方法を用ひないと云ふ。即ち積極への記入は總て假のものであつて、通帳の更新の際に總計し記入せらるべしと彼は云ふ。(註)

(註) Solvay, Notes sur le Productivisme et le comptabilisme, p. 138.

然しかくすればコンタビリズムの利點が著しく失はれ、却て不便が生ずる。即繰越原本を正確に

計算して貰ふ爲め、通帳を屢々新にせねばならぬ。そして此更新の要求をなす者あるときは、相手方として關係せる者の通帳の提出を求むるを要し、従て通帳の運用の停留を生ずる。殊に隔地者間の場合には多大の手數を要する。各地に分散せる郵便局は一々通帳の提出を相手方に命ぜねばならぬし、時間を要する。多くの授受關係ある一人の通帳の更新はかくて無數の通帳を檢査せねばならぬ不便を伴ふ。多數の人が通帳の更新を要求する場合の煩雜思ふべきではないか。殊に現代に於ては總て貨幣を以て購はざるべからずして、従て各人は毎日通帳を懷にして歩いてゐねばならぬのであるから、通帳の檢閲の不便は想像するに餘りある。

次に又ソルベールはコンタビリズムに於ける支拂は總て人的基礎に立つが故に安全であるが、貨幣は非人的であり物的であるから安全でないと云ふ。然し余は思ふ、貨幣は非人的であり、物的であり、従て價值を有するが故に安全であるのではなからうかと。(註) 貨幣を受くる者は、只此貨幣が偽物ならざることを確かむれば足るのである。如何に確かなる保證ありとは云ひ、抽象的記帳は價值其ものを荷へる貨幣の如く安全であり得ない。

(註) Auncy, Les systèmes socialistes d'échange, p. 311.

さはれソルベールは此らの障害を重大なるものとは考へない。彼曰く、『根本的に與へられたる解

決に於ける細かい困難は必然的に此解決法の價值を減ずるものではない。それは只之を解釋する者の想像力の不足を證明するのみである』と。又曰く、『コンタビリズム・ソシアルは眞理である、其概念は理論的に正確である』と。(註)

(註) Cité par Auncy.

尙筆者の疑は、社會に關する理論を直ちに實行に移さむとする場合に、かゝる樂觀主義を簡單に許し得べきか否かにある。現實の世には無知なる者もあれば、無學の者もあり、盜賊もあれば欺偽する者もある。完全なる徳を具へた人間のみを豫想しつゝ其立脚地に社會を改造せむには、其不成功は今より既に明かではなからうか。

八

コンタビリズムにありては、現今の振替制度に見るが如き當座預金の如きものがない。ドニスは云ふ、『ゲインヌの郵便振替貯金の組織の基礎は貨幣である。此點に於てそれは信用及補償の現代的制度(小切手及び手形交換制度)と何らの相異がない。然し貨幣の節約は一層著大である。そして貨幣流通のうちに、貨幣に尙從屬してはゐるが必ずしもそれに不可離的に結び付いてゐない流通

が起りつゝある。我ら（ドニスもコンタビリズムの信者である）の努力は此從屬關係を永久に斷絶せむとするにある』と。（註）

（註） Denis, L'organisation et le fonctionnement du service de chèques et de virements à la caisse d'épargne postale de l'Empire d'Autriche, Annales de l'Institut des sciences sociales, 2^{me} année, p. 209.

ソルベール曰く、『コンタビリズムの組織に於ては人民を代表する國家は要求をなす者に對し擔保信用にて獲得の單位を與ふ。そして之に對して國家は管理の費用のほか何ものも要求せぬ。此單位の數が擔保物件に對する記帳局の登簿評價金額即ち繰越原本の額を超過せざる限り、獲得の單位は交付せらるゝ』と。（註一）又曰く、『將來に於ては、國家が——社會の大なる利益となるは云ふまでもない——常に財の所有者たる生産者にのみならず、また能力あれ共財産を所有せざる生産者に對して其能力を單純なる擔保として、信用を與ふるに至るべきを誰か豫想せざる者があらうか』と。（註二）

（註一） Solvay, Notes sur le productivisme et le copabilisme, p. 158.

（註二） 既に原文のまゝ引用。

右の後段の主張は恐らくサンシモニアンの思想の影響を受けて生れたものであらうが、それはド・フォヴィルをして其著『貨幣』に於て左の一句を叫ばしむるに至つた。曰く、『記帳計算法に依

る支拂の開始を許さしむるものは常に資本家の現在財のみならず、労働者の將來の見込の利益である。されば赤兒と雖生れながらにして其搖籃に、將來に於て社會が彼より得べき用役を擔保として、コンタビリズムの通帳を得るであらう」と。(註)

(註) De Foville, La monnaie, p. 235.

今、ソルベーが極めて重要なりと思惟する能力に對する信用を問はずとして、動産及不動産を擔保としてコントを開かむとする主張のみを問ふ。コンタビリズムに於ては各人は動産又は不動産を擔保に合法的獲得の單位を受ける。金屬貨幣は我らが何らかの價值を讓渡することによりて得らるゝ獲得の手段である。コンタビリズムに於ける獲得の單位は何らの價值を讓渡することなく、動産、不動産を擔保として得らるゝものである。

それは信用貸付と異なる。即ち信用貸付に於ては利子支拂の現象を伴ふけれども、コンタビリズムの場合には國家は管理費のほか何ものをも受けない。國家は只物のうちより其價值を引出して獲得の單位とするのみである。ソルベーは之を云ひ表して云ふ、『コンタビリズムの作用は現在擔保を提供して信用を資本家に求むる場合に相類する。然し異なるは、現在の場合には信用を與ふる資本家に利子を支拂ふに反し、絶對的立場から云へばコンタビリズムに利子は存在しない。げにコンタビ

リズムに於ては我らは貨幣組織を去れる者であつて、交付せられる獲得の單位には内在的價值はない。利子の支拂もない』と。(註)

(註) Solvay, Notes sur le productivisme et le comptabilisme, p. 153.

現モンペリエ大學經濟學教授ロッシ・アギュソールは云ふ、『理論上コンタビリズムの記帳局は此らの銀行(預金振替銀行を指す)と明に或關係を有するかも知れぬが、それはコンタビリストの心中にて此らの銀行を飛び越えてゐる。それは商品擔保の貸付等とは何らの關係はない。貨幣に依る預金も無ければ、又他の財に依る預入がある譯でもなく、銀行と顧客との關係の常態的形態と之を同一視し得ない』と。(註)

(註) Roche-Agussol, Essai sur le clearing système, thèse, Montpellier, 1903, p. 93. (巴里國立圖書館及び巴里法大圖書館特別室にあり。)

ソルベールはオーウエン、ブルードンと異り、不動産の獲得單位化を重視する。『銀行券の準備は貨幣又は地金たる金銀である。然しそれが總て金銀の如く確實なる價值をもつ商品ならば、銀行券は現在の如く準備の基礎確實であると考へない者があらうか。それが土地、家屋等所謂不動産なりとせば、準備の基礎は一層確實であらう。もし銀行が其金庫中に其發行準備として抵當權證券を有す

れば、發行は現在以上に確實に保證せらるゝであらうと、余は云ふことが出来る。』(註)

(註) Solvay, Notes sur le prod et le comptabilisme, p. 136.

經驗はソルベールの主張を明に裏切つてゐる。かつて十八世紀に於て「Law」は貨幣を象徵に過ぎずとなし、從て金銀よりは一層確實なる土地を擔保として限り無く紙幣を發行し得べしと考へ、且つそれを實行した。其結果は見事なる失敗であつたことは人のよく知る所である。

かつてフランソア・ヴィダル(今日に至りては彼はもはや知られざる社會主義者ではない)は『總ての貨幣は價值であるから、總ての眞實の價值は貨幣化せられねばならぬ』と云つたが、然し我らが價值を貨幣化し得るには、それ自ら價值を有する他の一財を助けとせねばならぬ。此助けの財として金銀が用ひらるゝに至つたのは種々なる技術上の優れた點があるからである。(註)

(註) Auncy, Les systèmes socialistes d'échange, p. 320.

土地の地理的物理的性質こそは確實であるが、其價值はソルベールが考ふるが如くしかく確かなものではない。オーキイ教授は一九〇六年頃佛蘭西南方の葡萄園がかつて十萬フランたりしものが二萬フランに下落した例を擧げてゐる。

ソルベールは擔保たる物の價值の低下を詳述しない。然し彼はコンタビリズムの基礎を強固ならし

めむとして、動産は國家に對する債權に限るとも云つてゐる。尤も國家をして、今日と異り、借入れたるものを以て廣く商工業に投資せしむべしと云ふ。かくて國家は個人の財産を保證するに至る譯である。そして多數の企業中には基礎強固ならずして不成效に了るものもあらうが、國家の投資する企業は多數にして繁榮するものもあるべく、一般の景況と共に變化する平均配當率が生ずる。此平均利潤率は現今の平均率より大なるべく、而も配當金は現在の率に止め、殘部を國家の經費に充當すべしと云ふ。(註)

(註) Solvay, Notes sur le productivisme et le comptabilisme, pp. 125 et suiv.

動産の場合にはかくして確實を期し得べしとするも、不動産の場合には如何にすべきであらうか。例へば擔保たる土地の價值が著しく低下し、支出せる獲得の單位が繰越原本を超過したとする。之を記帳局に引き受くべきか。引受くとするも、誰が耕作すべきであるか。又は記帳局は損失を忍びて賣却すべきか。ソルベールは賣却を考ふるが如くである。

『如何なる時に於て沒收を宣すべきか。獲得單位の交付の極限の達せられたるとき、即單位數が擔保物件の記帳局の評價々格にまさるに等しきに至れる時であるのは明なるが如くである。此時若干の猶豫を與へ一時的繰越原本の確認を行はしめ、保證金として、擔保に對し許したる單位數の減額

を要求する。然も尙其まゝ猶豫期限を經過すれば。沒收を行ふ。かくて擔保物件は賣却せらる。…として沒收によりて損害を受くる者に對し社會的鑑定の組織ありて現在の公賣に等しき保證を與ふる程度の組織あらば、擔保物件は國家(記帳局)の手に至る。國家は之を保有するも賣却するも自由である。實際の價格と記帳局の登録額との差を支拂ふは勿論である。』(註)

(註) Solvay, Ibid., p. 155.

之に依て見ると、無料にて與へらるゝ獲得單位は擔保物の金額に非ずして、從て現實の價額と相異してゐる記帳局の價格あることが認めらるゝが如くである。然し如何なる評價も私的利益に關係なき役人によりてなさるゝ瞬間より不確となり、危險となり、少くとも任意的となる。(ソルベールは先に述べしが如く自利心に據るに非れば經濟の運行の宜しき得ざるを力説してゐるのである。)(註)從て賣却に際し不足を生ぜざるが如き正確な評價を望み得ない。賣買に先つてなさるゝ評價は常に不確實である。

(註) Solvay, Lettres sur le productivisme et le collectivisme, 1900 中に此能度が最も明である。

筆者は未だに獨逸に於ける最近のノミラリストの實行上の理想的組織を研究しない。ゲッセルやニース市を根據とする佛蘭西近時の世界經濟自由主義論者の理想は恐らくはブルードンの昔に歸ら

むとするのではあるまい。今此ら最近の學說に對する研究を極めて近い後日に留保すれば、ソルベ
ーの主張は極めて大膽である。ザイダルにしてもブルードンにしても何らかの象徴を用ひむとする
が、ソルベーは一切此らの物をも廢止し、只數字の記帳を以てせむとする。ソルベー曰く、『ド・グ
レエフは既に現在に於けるあらゆる傾向は此最終の竟局（國家の手に依る信用の中央集中化）に向
ひつゝあるを證明し、且つ將來に於ける富の流通上より見たる進歩は金屬貨幣の廢止によりて行は
るべきことを説いた。余は敢て總ての貨幣の廢止と云ふ』と。（註）

（註） Cité Par Auncy, op. cit., P. 324.

かくしてソルベーの理想は交換の仲介としての貨幣を廢止せむとすることにある。云ふ迄もなく昔の
物々交換に歸らむとするのではない。そこには生産物の直接的交換はない。而も賣買はある。それ
は通帳に表はるゝ數字の移轉によりて示される。かくて物は直接的交換の價值を得る譯である。而
して數字は *monnaie signe* として残る。

小切手、手形交換による決済には金屬貨幣が價值の尺度の職分を盡してゐる。然し我らの見る所
によれば——敢て我らと云ふ、そして古き思想をもつとの批難は受けぬ前から承知しつゝ——そ
れは金屬貨幣は交換の仲介たる職分を盡してゐるからである。交換の媒介物たらざるものが、尙價

値の尺度たり得るであらうか。ブルードンは當初の思想を捨て、後年に於ては之を不可能なりと考へた。(註)

(註) ブルードンに關しては近く『ブルードンの無料信用論』の一文を公にしたいと思ふてゐる。

九

交換の媒介物としての金屬貨幣の消滅は價值の尺度としての金屬貨幣の消滅を伴ふ。それはソルベーの告白でもある。コンタビリズムに於ては交換 l'échange は消滅する。在るは只取引 la trans-action であつて、其記號は簡單にして迅速に記され、一方は積極にして他方は消極である。凡ての取引は此二つの記入即記帳計算單位の減少及び増加の記入によりて行はれる。それには二つの假定がある。(一)各人の獲得の單位を限定する評價額を定むるため一定の單位に依る評價を要す。(二)積極又は消極に於て後に生ずる増減は、最初の評價單一と同一でなければならぬ。もしこの單位が不變なるに非れば、積極及び消極の評價單位に不一致を來す譯である。例へば此單位の價值減少すれば、繰越原本は減ぜられたることとなる。一定不變の單位あるに非れば、コンタビリズムは此點に就ては現在の組織に毫も優り得るものではない。

コンタビリズムに於ては、金は交換の媒介物たるの地位を失ひ、益々其價值を減すべきが故に、今日既に不變的單位に非るそれは到底不變的單位たり得る筈がない。

嚴密に云へば價值の眞の尺度なるものはない。『フランは價值の尺度に非ずして、貨幣それ自身の單位である。……理論上一財の價值なるものはない。此財を比較する財だけ價值 *valeurs* がある。故に價值は測定し得られない。』(註一) 尤もマルクス又は共產主義の世界に於ては一定不變の價值從て其尺度があり得るが、其場合に於ける價值なる概念は、我らが云ふ價值なるものゝ概念とは全く異なるものである。彼等の云ふ價值は勞働量である。(註二)

(註一) Houques-Fourcade, *Éléments d'économie politique*, 1923, Toulouse, pp. 129—130.

(註二) Houques-Fourcade, *Ibid.*, p. 130; Auncy, *op. cit.*, p. 330—331.

然しソルベールはかゝる價值概念の改造を行はむとする者ではない。彼は現にあるが如き價值を考へてゐる。(註一) 而して先に云へるが如く、價值は比較的のものである。即ち價值の測定をなすには此財を他の財と比較せねばならぬ。故に價值を測定することは既に不變的な價值の單位を捨つることである。此デレンマを如何にして解くべきか。之がソルベールに與へられたる問題である。(註二)

(註一、註二) Auncy, *op. cit.*, pp. 331—332.

ソルベールは云ふ、『常に運動する物を比較すべき單位を求むれば、數字的平均がある。故に之らを極めて短かい時間のうちに——其間此らは靜止せるものとし——考へ、單位たるべきもの一を選ぶにある』と。又曰く、『此單位は之を無限に用うれば、不滅であらう』と。(註)

(註) Cité par Auncy, op. cit., p. 335.

それは何故であらうか。ソルベールは二つの説明を與へる。(註)

(註) Solvay, Notes sur le productivisme et le compabilisme, chapt. I.

(一) 心理的説明。初め具體的なりし單位が不變的となるべきが爲には、それが具體的たることを止め、心理的記憶となれば足るとソルベールは云ふ。『貨幣の使用は價值の單位から其有せざるべからざる不變性を奪つて仕舞ふ。此單位は事實上眞の商品と結合してゐるから、社會は取引の欠くべからざる要素となる此物が欠乏したり、又は多くなつたりする危險に曝され、此素材に就て行はる取引の影響を受く。』(註) 然るに單位の價值は物質的援助を離れて、心理的記憶としてのみしか存在しなくなると、それは價值ではあるが一定となるのである。

(註) Solvay, op. cit., p. 18.

(二) 數學的説明。一物の價值 v は人間が之を所有せむと欲する欲望の平均 \bar{u} を人間の數 N に除

じ、此物の供給。にて除したる商である。但し p, h, o は正確には知られ得ないものである。

$$v = u \times \frac{dh}{o}$$

は選べる單位の比例係数を示す。 $\frac{dh}{o}$ は價值の決定が行はるゝときの需供關係に他ならぬ。之を
 田にて表せば、

$$v = u \times E$$

となる。

$$v = u \times E, \quad v' = u \times E'$$

$$\therefore \frac{v'}{v} = \frac{E'}{E}, \quad v' = v \times \frac{E'}{E}$$

かくて單位が一定不變なれば、一財の價值を示すには元の價值に此ら二時期に於ける需供關係の相異を表す比を乗ずればよい。反對に $E' = E$ なりとせば、即ち $\frac{p' + h'}{o'}$ が $\frac{p \times h}{o}$ に等しき値ならば、一財の價值は元の價值に等しい。然るに此式によつて明なるが如く需供の變動ある限り、如何なる財の價值も變動するから、之を以て一定的單位となし得ない。依つて一財の極めて短い時間に於ける價值を採り來つて、之を單位とし、凡ての取引を此單位にて記帳し、且つ此記帳を合理的形

式の下に行ふに非れば不變的單位を得ることが出來ぬ。而して一度此不變的單位を得れば、之を物的基礎に結び付くる必要はない。

かく觀來るとき、ソルベールは一方に價值の測定には比較を要することを認むると同時に、比較を要せざる價值ありと考ふるが如くである。然し我らは思ふ、單位は價值を測定するが測定せらるゝものである。従つて測定する單位が一定不變なりとすれば、測定せらるゝものも不變でなければならぬ。價值には抽象的價值も內在的價值もあり得るものではない。嚴密に云へば財には價值があるのでは無くして、價值の程度があるのである。(註)

(註) Auncy, op. cit., p. 340, Hougues-Fourcade, *Éléments d'économie politique; la circulation*, chapt. II.

然し筆者は茲に貨幣及び價值に關する根本問題を盡し得べきではない。筆者の貨幣觀が古いと云ふ批難は豫め承知してゐることを再び斷つて置く。

バレットに至りては、金屬貨幣に對し特種なる作用を認むるが如くである。"Pour peu qu'on y réfléchisse — dit cet auteur (Solvay) — on s'aperçoit..... que la monnaie ne sert exclusivement qu'à acheter; elle a et elle est un pouvoir d'achat; elle n'est rien d'autre ! Voilà l'erreur fondamentale du système. La monnaie métallique a bien d'autres fonctions. Lorsque la difficulté de se pro-

curer de l'or augmente, c'est un avertissement, pour le pays où ce phénomène se produit, d'avoir à moderer ses achats, de ne pas se lancer dans de nouvelles entreprises, dans de nouvelles immobilisations de capitaux mobiliers.” (註)

(註) Pareto, Les systèmes socialistes, t. II, p. 280.

然しかゝる議論をなさずとも、象徵貨幣の赴くべき恐るべき實踐的結果を證明するのみを以て、コンタビリズムの第三點の破産を宣し得べしと思はるゝ。

コンタビリズムに於ける獲得の單位は、名指れたる財の象徵ではない、多數の財の全體の象徵である。故に此獲得の單位の數に制限がない。されば此單位の價值は、其流通額に反比例して減少せざるを得ざるに至る。バレット曰く、『ド・フォヴァイルは佛蘭西に於ける私有財産を二二五〇億と概算してゐる。尙概略にして二〇〇〇億なりとする。もし各人がソルベールの欲するが如く其財産の全部又は一部を容易に移轉し得べき力（獲得の單位を指す）となしたとする。流通額は二〇〇〇億又は其一部となるであらう。假に財産の半分が此力に換へられたとするも、尙一〇〇〇億である。現在佛蘭西の流通金屬及紙幣は七十億である。勿論現在此らの他小切手其他の支拂手段もあるが、然し流通額が二〇〇〇億又は一〇〇〇億となれる時の物價の騰貴は驚くべきものであらう』と。(註)

(註) Pareto, Ibid., t. II, p. 281.

×Ⅲゝ “Selon Giffen, les terres et les maisons ont, en Angleterre, une valeur à peu près de 100 milliards. Si la cheque bank, dont paie M. Solvay, prenait hypothèque que sur ces terres et ces maisons, et émettait pour 100 milliards de chèques, il se peut qu’ils fussent parfaitement garantis, mais il est certain que cette emission ferait énormément hausser les prix et provoquerait les plus graves perturbations. Il faut remarquer, en outre, autant pour le système de Proudhon que pour celui, fort semblable, de M. Solvay, que *l’évaluation des biens économiques donnés en garantie de l’émission* (ou de la somme dont on est crédité en comptabilisme social de M. Solvay) *depend elle-même de l’émission*. Vous évaluez, sous le régime de la circulation or, les terres et maisons de l’Angleterre à 100 milliards, et vous distribuez, aux possesseurs de ces terres et de ces maisons, soit en chèques, soit de tout autre manière, 100 milliards de ‘pouvoirs d’achat’. Tous les prix vont hausser énormément. Une nouvelle évaluation de ces biens donnera, par exemple, 200 milliards, et il est probable que l’augmentation réelle serait beaucoup plus grande. L’émission de la banque, ou la somme dont elle crédite ses clients en comptabilisme social pourra donc être

portée à 200 milliards; ce qui, de nouveau, changera l'évaluation, et ainsi de suite. Enfin, on ne peut pas limiter une émission par l'évaluation, faite dans la nouvelle monnaie, de certains biens économiques." (註)

(註) Pareto, Les systèmes socialistes, t. II, pp. 282—283, Aussi voir Hougues-Fourcade, op. cit., p. 190.

(一九二六、五、二八)

